

現在は瞬間か

伊佐敷隆弘

Abstract

Philosophers who study time often presuppose that the present is a durationless moment. But the reason is seldom explicitly expressed. There could be at least two arguments for it. And both arguments depend on the implicit assumption that when time passes the present becomes the past. But if we don't take the linear image of time for granted, this assumption is not self-evident though its converse proposition may be. Without this assumption I put forward a new image of the present and the past. The present is non-metrical and when we refer to an event-individual, the past emerges and the present comes to have a breadth. The emergence of the category of event-individuals and that of the past time are co-original.

はじめに

「時間は実在か、非実在か」という「all or nothing」の答えを与えようとするのではなく、時間という現象のどの側面が世界の側に属し、どの側面が我々の側に属しているかをできるだけ細密に描くこと。本論文がめざすのはこの課題を、部分的にではあれ、果たすことである。

具体的には、「現在は瞬間である」という主張を導く議論がいかなる暗黙の前提に依拠しているかを明らかにし（1～4節）、その前提を置かない場合に「現在の幅」や「現在から過去への移行」についてどのように考えることが可能であるかを示す（5～8節）。

なお、本論文においては「瞬間的時点」の存在は仮定した上で「現在の瞬間性」について議論する¹。

1. 暗黙の前提としての現在瞬間説

現在瞬間説（即ち「現在は瞬間である」という主張）は哲学的時間論（とりわけ分析哲学系の時間論）の多くにおいてほとんど自明の前提とされている。例えば、分析哲学における代表的な時間論の本²を書いたメラーは「現在時制（present tense）」と「現在時点（present moment）」とを区別し、「現在時制とは現在時点を含む期間（interval）である」と言う。例えば、「この千年紀」「今週」「この1分」、これらはいずれも現在時点を含んでいるから現在時制であるとメラーは言う³。

また、トゥーリーは「現在と過去は実在的（real）だが、未来は実在的ではない」と主張するが、彼は、「現在とは、事態が存在し始める時点（the point at which states of affairs come into existence）である」と言う。つまり、トゥーリーの描く動的（dynamic）な世界において、実在的なものは常に増加し続けており、その先端に「瞬間としての現在」が位置している⁴。

このようにメラーもトゥーリーも「現在は瞬間だ」と考えているが、彼らはその根拠を明示していない。また、この2人に限らず、現在瞬間説の根拠が明示されることはある⁵。

2. 述語・特性・系列

現在瞬間説の背後には「線上の点としての現在」というイメージがあるようと思われる。即ち、線によって時間をイメージし、その線上の点によって現在をイメージするというものである。しかし、時間の線イメージは言うまでもなく比喩であり、比喩は限界を持つ。というのは、喻えるものと喻えられるものとはすべての性質を共有するわけではないからである。線は空間内に存在する図形であり、目に見えるが、時間は図形ではなく目には見えない。また、我々は同じ一つの線を（例えば路線図として）空間的に解釈することもできれば（グラフの時間軸として）時間的に解釈することもできるが、空間的にではなく時間的に解釈している際に働いている我々の時間理解の内には線イメージに依拠しない内容が含まれているはずである。そうでなければ、我々は路線図と時間軸を区別できないであろう。

分析哲学における時間論は、20世紀初頭にマクタガート⁶が設定した「A系列」と「B系列」という土俵の上で展開してきた。A系列とは、「遠い過去から近い過去を通って現在に至り、現在から近い未来を通って遠い未来へと

続く、或いは、逆の方向に続く、出来事ないし時点の、系列」であり、B系列とは、「以前から以後へと続く、或いは、逆の方向に続く、出来事ないし時点の、系列」である。マクタガートはAB両系列の実在性を否定し（その結果、時間の実在性を否定し）たが、その後の分析哲学の時間論においては、A系列の実在性を認める論者（A論者）とB系列の実在性だけを認める論者（B論者）とに別れて論争が行なわれてきた⁷。

しかし、このように、議論の土俵が最初から「A系列・B系列」という線イメージによって設定されたのは分析哲学の時間論にとって不運であった。というのは、第一に、前述のように時間には線イメージからこぼれ落ちる側面があるからであり、第二に、そもそも「述語（predicate）」と「特性（characteristic）」と「系列（series）」という3つのレベルは区別されるべきだからである。「過去」「現在」「未来」「以前」「以後」「同時」という単語や時制などの言語表現（即ちA述語やB述語）が存在することについては争う余地はないが、それらの述語が出来事ないし時点の持つ特性（「A特性・B特性」）を表していると言えるためには、「出来事（event）」ないし「時点（moment）」の存在にコミットしなければならない。また、その際、「記憶」や「予期」に関する考察も必要となるであろう。そして、さらに進んで、「A系列・B系列」というような「系列」が言えるためには、出来事ないし時点が一列に並んでいることが必要であり、そのためには、変化の全順序性・一方向性（即ち、変化のつながりが途切れない、枝別れしない、ループしない、などの条件）が必要であろう。それゆえ、また、「因果」や「行為」と時間との関係を明らかにすることが先決問題となろう。要するに、「A系列・B系列」は「系列」というその単純な見かけに反して相当に複雑な中身を伴っている。したがって、時間の線イメージは時間論において前提にできるほど基礎的なものではなく、むしろ、説明を要求されるべきものである。

本論文は「現在とは何か」という問いを、時間の線イメージを前提することなく追究する。それゆえ、単純に「現在は瞬間か、それとも、幅を持つのか」という二者択一を問うことはしない。

3. 現在瞬間説の論拠（1）一時間の経過

ウィリアム・ジェイムズ⁸は、「厳密な現在（strict present）」と「見かけの現在（specious present）」を区別している。前者は瞬間だが後者は幅⁹を持つ。厳密な現在は我々の直接経験の対象ではなく、我々が経験するのは見かけの現在である。しかし、反省は「厳密な現在が存在するに違いない」という結論へ我々を導く。ジェイムズはこのように言う。

我々が「現在」という時間を意識する場合、それが或る幅を持つものとして意識されているということは心理学的な事実として肯定できるであろう。問題は「厳密な現在」の方である。それが「幅を持たない」即ち「瞬間である」と言える根拠は何なのか。

ジェイムズはその根拠を詳しく述べていない。しかし、現在瞬間説を導く議論は既にアウグスティヌスの『告白』第11卷¹⁰のうちに見出すことができる。その議論は要するに「どんな幅の時間を考えても、それを過去の部分と未来の部分に分割できる以上、その幅は現在の幅たりえない。したがって、現在は幅を持たないはずだ」というものである。

この議論は以下の1～4のステップからなる推論であると考えることができる。(ただし、本論文では、現在から過去への移行だけに論点を限定する。)

- 1：幅のある現在の中において時間が経過している。（背理法の仮定）
- 2：したがって、幅のある現在の中の或る部分は既に過去になっている。
- 3：したがって、その部分は現在でありかつ過去である。が、これは矛盾である。
- 4：したがって、現在に幅があるという前提が誤っており、現在に幅はない。

この推論に問題はなさそうだが、実は1から2を導くためには次の暗黙の前提Aが必要である。

A：時間が経過すると、現在が過去に移行する。

この前提Aがなければ1から2は出てこない。そしてこの前提Aがあれば1から2が出てくる。

では前提Aは成り立つか。確かに次の「Aの逆」は無条件に成り立つであろう。

Aの逆：現在が過去に移行するとき、時間が経過している。

しかし、Aが成り立たない可能性、即ち「時間は経過しているが、現在から過去への移行は生じていない」という可能性はないだろうか。

実は、見かけの現在に関してAは成り立たない。ジェイムズがあげる例だが、歌の一小節を聴く場合や流れ星の動きを目で追う場合、時間は経過して

いるが、その経過はすべて現在（見かけの現在）の中で生じているように経験される。

前述のように、ジェイムズによれば、我々が経験する時間（即ち見かけの現在）は幅を持っている。彼の言葉¹¹で言えば、「我々の時間知覚を構成する単位は持続（duration）である。それには、言わば船首と船尾がある、即ち、前方を見る端と後方を見る端がある」。さらに、ジェイムズは、この持続が一体として経験されることを強調する。「我々は、「まず一方の端を感じた後にもう一方の端を感じ、この継起の知覚に基づいて両端の間の間隔を推理する」のではない。我々は、この時間間隔を全体として（即ち、その二つの端がそこに埋め込まれた全体として）感じている。[...] 感覚的知覚にとって〔持続のこれらの〕要素は分離不可能である」。ジェイムズは、持続の構成要素がまず経験され次にそれらの要素から持続が構成される、という可能性をこのように強く否定する。つまり、見かけの現在において、時間が経過しつつもそれが要素に分解されることなく一体として（即ち、一つの現在として）経験されることを強調している。厳密な現在が直接経験の対象でないとする以上、これはジェイムズにとって当然の帰結であろう。

歌の一小節や流れ星の動きは、一体のものとして、一つの現在の中で経験される。したがって、見かけの現在に関しては先の前提Aは成り立たない。

尤も、これに対してはただちに次の反論がありうる。即ち、「見かけの現在は厳密な現在ではない。見かけの現在においても本当は現在（厳密な現在）から過去への移行が生じており（即ちAが成り立っており）、ただ我々がそれに気づかないだけなのだ」という反論である。

しかし、このように、見かけの現在の中での時間の経過を「厳密な現在から過去への移行」と捉えることができるのは、この反論が実は次の前提Bを置いているからである。

B：厳密な現在は瞬間である。

この前提Bを置くと、「時間が経過している以上、厳密な現在（即ち瞬間）に留まっていることはできないはずだ」ということが導かれ、さらにそこからAの「時間が経過すると、現在が過去に移行する」が出てくる。このように前提Bを置けば確かにAは成り立つ。

しかし、よく見ると、前提Bは元の推論の結論4「現在に幅はない」と同じものである。つまり、前提Bを置くと、この推論は循環してしまう。したがって、BをAの論拠とすることはできない。

結局、先の1～4の推論が成り立つかどうかは、前提Aの成否にかかっている。もし「現在から過去への移行でないような時間の経過」が可能であるなら、現在瞬間説を導くこの推論は成り立たない。

4. 現在瞬間説の論拠（2）—継起的経験

現在瞬間説の論拠として考えられるものとして、第二に、継起的経験の存在がある。ここに言う「継起的経験」とは、単に「経験が継起している（相次いで生じている）」ということではなく、「経験が継起していることを経験している（認識している）」ということである。言い直せば、単なる「経験の継起」ではなく「継起の経験」である。例えば、メロディーの知覚は継起的経験である。

さて、前節のジェイムズの議論の続きをみてみよう。その末尾の「感覚的知覚にとって〔持続の〕要素は分離不可能である」という文の後に実はジェイムズはこう付け加えている。「ただし、事後的な注意が容易にこの経験を分解し、その始めと終わりを区別するのであるけれど」。これは具体的には次のような事態のことであろう。

歌の一小節を聴くとき、我々はそれを見かけの現在の中において一体のものとして聴く。しかし、一体のものとして聴かれたこの一小節について事後に反省すると、始めの音がドであり終わりの音がミであったこと、また、途中で音が細かく変化したことも思い出される。そして人によってはこの音の変化を楽譜に書き留めることもできる。

すると、次のような推論1～3によってこの事態を現在瞬間説の論拠にすることができるかもしれない。

- 1：私が一度に聞き取るのはメロディーの瞬間的一断面だけである。
- 2：私が音を聞き取るのは常に現在においてである。
- 3：したがって、現在は、メロディーの瞬間的一断面に対応する時間、即ち、瞬間である。

補足しよう。音の変化があった以上、それらの音が同時に聞こえたはずはない。もし、そうなら、メロディーではなく、不協和音が聞こえたはずだ。要するに私に一度に聞こえた音は一つだけのはずである。では、「一つの音」とは何か。同じドの音でも音量や音色が微妙に連続的に変化したことを私は思い出す。それゆえ、私が一度に聞き取った一つの音はメロディーの瞬間的一断面であったはずだ。ところで、我々の経験は（見かけの現在であれ、厳密

な現在であれ) 現在において生じる。したがって、現在とは、「メロディーの瞬間的一断面に対応する時間」即ち瞬間である。このような推論である。

第3節の推論に隠れた前提Aがあったように、この推論にも実は隠れた前提がある。即ち、1と2から結論3を導き出すために次の前提Cが用いられている。

C：一つの現在の内部において継起的経験が生じることはありえない。
(即ち、一つの現在における経験内容は必ず全体が同時に経験される。)

Cによれば「一つの現在の内部において知覚された複数の音は、メロディーとして継起的に聞こえることはありえず、必ず和音として同時に聞こえる」のであり、それゆえ、「和音としてでなくメロディーとして聞こえる以上、それらの音は一つの現在の内部において知覚されてはいない」ということが導かれ、結局、「メロディーの各瞬間的断面に対してそれぞれ異なる現在が対応する」ということが帰結する。

しかし、もしCが偽であつたら1と2から結論3は出てこない。というのは、その場合、一つの現在の中で複数の音が聞こえても、不協和音として同時に聞こえるのではなく、メロディーとして継起的に聞こえる、ということが可能になるからである。言い直せば、その場合、前提1の「一度に」が「一つの現在」に対応しないからである。

見かけの現在に関しては(1と2は真だが)Cは偽である。では、厳密な現在に関してCが成り立つと言える根拠は何であろうか¹²。

時間の経過は継起的経験が生じるための必要条件¹³であろうから、Cの否定はAの否定を含意する。

Cの否定：一つの現在の内部において継起的経験が生じることがありうる。

Aの否定：時間が経過しても現在が過去に移行しないことがありうる。

したがって、Aが成り立てばCも成り立つ。(対偶をとる。)

A：時間が経過すると、現在は過去に移行する。

C：一つの現在の内部において継起的経験が生じることはありえない。

結局、第3節と同じく、ここでも前提Aの成否が問題になる。Aが成り立た

なければ、継起的経験を現在瞬間説の根拠にすることはできない¹⁴.

5. 2種類の時間経過（現在内時間経過と過去移行的時間経過）

現在瞬間説の可否は「現在から過去への移行でないような時間の経過」の可能性にかかっている¹⁵ことが明らかになったが、他方、我々は先に第3節で「Aの逆」即ち「現在が過去に移行するとき、時間が経過している」ということを認めているから、ここに2種類の時間経過が登場することになる。即ち、「現在から過去への移行でないような時間経過」と「現在から過去への移行であるような時間経過」の二つである。簡略のために、前者を「現在内時間経過」と呼び、後者を「過去移行的時間経過」と呼ぶことにしよう。

では、これら2種類の時間経過はどのように異なっており、かつ、どのように関連しあっているのか。とりわけ、現在内時間経過の存在を認めた場合、過去移行的時間経過はいかにして生じうるのか。

ラッセル¹⁶は見かけの現在について次のような議論をしている。刺激の始まりにおいて我々は感覚を持つが、感覚は徐々に色あせて行きやがて記憶イメージに変わる。この色あせていく過程が見かけの現在である。見かけの現在において、より古い部分とより新しい部分は区別され、最も古い部分は最も多く色あせており、最も新しい部分は感覚的特徴を完全に留めている。このように、ラッセルは、見かけの現在を感覚が色あせていく過程として捉え、この過程の完成（完全に色あせること）を、見かけの現在から過去への移行であるとしている。

ラッセルのこの考え方は彼自身が言うように「純粹に心理学的な」ものであるが、これを先の2種類の時間経過に当てはめるならば、「過去移行的時間経過は現在内時間経過の終点として生じる」ということになる。しかし、その場合、「現在内時間経過が終点に達するとはどういうことか」という問い合わせ、「現在内時間経過がどれだけの時間続ければ終点に達するのか」という問い合わせがたちに生じるであろう。そして、これらの問い合わせに適切に答えるのは容易ではない¹⁷。

しかし、このように現在内時間経過がそのまま過去移行的時間経過につながるのではなく、なんらかの別の要素が加わって初めて過去移行的時間経過が出現すると考えることはできないだろうか。

6. 出来事個体への指示

出来事個体への指示が行なわれることによって過去移行的時間経過が出現する。このように考えてみたい。以下説明する。

過去移行的時間経過には「目撃不可能性と事後的気づき」という特徴がある。例えば私が「現在が過去に変わる」ようすを目撃しようとして、書斎の机に座り何が起こるかじっと観察したとする。そのとき私の眼には同じ机とパソコンが見え続け、外からは鳥の声が聞こえて来る。私に観察できるのはこのような物個体の性質の変化（或いは不変化）だけであって、「現在が過去に変わる」ようすは観察できない。しかし、改めて考えると、やはり時間は経過しており、「今から観察しよう」と思ったときのその「今」は既に「5分前」という「過去」になっていることに私は気づく。しかし、一体「いつ」過去になったのか、私は言えない。このように、過去移行的時間経過は、改めて考えるとそれが「既に起こっていた」ことに気づくが、現在が過去に移行する瞬間を目撃することはできない。この現象はどのように説明できるだろうか。

物個体の性質の変化は常に現在において生じる。変化は現在内時間経過の中において次々と生じては（その痕跡を残しつつ）消えて行く。しかし、変化が生じているだけでは過去移行的時間経過は起こらない。私は「観察し始めたのは5分前だったな」と改めて考える。そして、既に現在が過去へ移行したことについて初めて気づく。実はこのとき私は同時に或ることをしている。即ち、私は「私がさきほど観察を始めた」という出来事個体への指示をこのとき初めて行なっている。とすれば、この出来事個体への指示の際に初めて過去移行的時間経過が現れていると考えられないか。

つまり、過去移行的時間経過が目撃できず、改めて考えた後もそれがいつ起こったのか言うことができないのは、改めて考えるまで実はそれが生じていないからであり、また、にもかかわらず改めて考えると「現在が過去に変わっている」ことに気づくのは、改めて考えるまさにそのときに過去移行的時間経過が（「既に起こっていた」というあり方で）現れるからである。このように説明できないだろうか。

では、なぜ出来事個体への指示によって過去移行的時間経過が出現するのか。

物個体と出来事個体の存在の仕方には大きな違いがある。物個体は、時間を貫いて存在し、変化を蒙り、消滅したり再生したりすることもありうるが、出来事個体は、一旦成立すれば、変化することなく、消滅したり再生したりすることもない。物個体がその登場（例えば人の誕生）とともに完全な一個体として成立し¹⁸、さまざまな変化を蒙ったあと消滅する（例えば人が死ぬ）のに対し、一定の時間的幅を持つ出来事個体は登場し始めたときにはまだ完全な一個体ではなく、そのさまざまな時間的部分（temporal part）がす

べて登場し終わった後にやっと完全な一個体になる。ただし、いかなる範囲を一つの出来事個体とするかは(物個体に比べて)かなり任意であるから、出来事個体の存在は我々によるその指示に依存する度合いが大きく、出来事個体が事後的に成立することもある。(前述の「私がさきほど観察を始めた」という出来事個体の場合など)。そして、過去の出来事とどれほど似た出来事が生じようともそれらは別の出来事個体だと見なされるようになる。つまり、出来事個体は「再生」しない。そして、「消滅可能なものは再生可能でもある」と言ってよいなら「再生不可能なものは消滅不可能だ」と言える。また、未来の出来事に関しては「出来事一般」は存在するが、「出来事個体」は存在しない。少なくとも未来の出来事は一般的にしか指示できない¹⁹。例えば、「北京オリンピック²⁰」がなんらかの理由で開催されなかった場合や開催地や開催期間が大幅に変更された場合を考えれば明らかのように、実際に開催されるまでは「北京オリンピック」という語は固有名ではなく「北京において2008年に開催されるオリンピック」という不確定記述の省略形だと見るべきである。

要するに、出来事個体は、過去に関してしか存在せず、その「変化」や「消滅」や「再生」を語ることはできない。それらは「実現不可能」というより「概念的に不可能」である²¹。そのような出来事個体が成立し指示されることによって、変わることのない、或いは、変えることのできない過去が生じる。もし出来事個体という存在者のカテゴリーがなければ「変わらないものとしての過去」もまた現れないであろう。過去移行的時間経過は「現在内時間経過の終点として」出現するのではなく、「現在内時間経過の中で出来事個体への指示が行なわれるたびごとに」出現する。

もし以上の議論が正しければ、現在内時間経過というものが可能であり、したがって現在瞬間説は間違っているということになる。しかし、現在が瞬間でないとすると、現在には幅があるのか。そうであるとも言えるし、そうでないとも言える。どういうことか。

7. 「経験の場としての現在」と「過去でないものとしての現在」

2種類の時間経過が存在するとすると、それに応じて「現在」のあり方も2通り存在することになる。「現在内時間経過だけが生じている場合の現在」と「過去移行的時間経過が出現した場合の現在」の2通りである。それぞれ「過去が現れる以前の現在」と「過去が現れた後の現在」と呼ぶこともできる。前者は言わば「経験の場としての現在」であり、後者は「過去でないものとしての現在」である。両者いずれにおいても現在内時間経過が生じているが、後

者においてはさらに過去移行的時間経過も生じている。

「現在内時間経過」即ち「過去への移行でないような時間経過」だけが生じている「経験の場としての現在」に幅はない。かと言ってそれは瞬間でもない。「経験の場としての現在」は言わば「非測定的現在 (non-metrical present²²)」であって、その「幅」について云々することはできない。時間の線イメージに囚われなければ、このことはそれほどナンセンスではない。

そして、非測定的現在である「経験の場としての現在」が、出来事個体への指示によって言わば「区切られる」ことにより「幅」を持ち、そのことによってその都度現れるのが「過去でないものとしての現在」である。前述の「観察し始めたのは5分前だった」という例の場合、5分前の出来事個体が指示されることによって、逆にこの5分間が「過去でないものとしての現在」として現れて来る。ただし、その「幅」は(5分を越えることはないが)はっきりした大きさを持つわけではない。また、「過去でないものとしての現在」の幅は指示される出来事個体次第で変わる²³。

「経験の場としての現在」の中で出来事個体が指示されるたびごとに、過去移行的時間経過が(「既に起こっていた」というあり方で)出現し、それに伴い、その都度異なる幅を持つ「過去でないものとしての現在」が出現する。「現在から過去への移行でないような時間の経過」の可能性を認めることによって、時間のこのような捉え方が可能になる。

8. 物個体と時間

しかし、「出来事個体への指示によって過去が現れる」と述べることは、「過去とは言語的制作物だ²⁴」ということを意味するわけではない。出来事個体への指示には当該出来事個体に登場する物個体への指示が含まれており、そして、物個体の存在は、出来事個体の存在ほどには、我々による指示に依存していない²⁵。それゆえ、出来事個体の存在は物個体の存在という制約のもとにあり、その限り我々がまったく恣意的に出来事個体を発生させうるわけではない。

したがって、また、本論文は「出来事個体を基礎的存在者とし、そこから物個体の存在を導出する」という立場²⁶をとらないが、逆に、「出来事についての陳述のように見えるものは、実は根本的には物についての陳述である²⁷」というような出来事消去論もとらない。物個体と出来事個体の両方に存在を認めるべきである。ただ、出来事個体の存在は、一方では物個体の存在に依存し²⁸、他方では我々による指示に依存している。

尤も、ここには「物個体と時間」に関する別の問題がある。即ち、「出来事

個体の成立とともに過去が出現するのなら、出来事個体というカテゴリーが出現する以前の物個体に過去はないのか」という問題である。

したがって、本論文で述べたような出来事個体の成立と指示について十分に説明するためには、さらに物個体の成立や指示との関連についての解明が必要である。また、「遠い過去の出来事個体」と「近い過去の出来事個体」の区別が言えるためには「時間の長さ」や「運動の長さ」に関する解明も必要であろう。これらの点については稿を改めて論じたい。

注

1. もし瞬間的時点が存在しないなら、ただちに現在瞬間説は誤りだということになる。即ち、「時点の瞬間性」は「現在の瞬間性」の必要条件である。しかし、十分条件ではない。というのは、「一つの現在」の中に「複数の瞬間的時点」がもし存在するなら、そのような現在は「瞬間」ではないからである。なお、注14も参照せよ。
2. D. H. Mellor, *Real Time*, Cambridge University Press, 1981; *Real Time II*, Routledge, 1998.
3. D. H. Mellor, *Real Time*, p. 17; *Real Time II*, p. 9.
なお、メラーの言う「時制(tense)」とは、動詞の時制だけでなく、「10分前」「今日」「来年」などの表現を含む。いわゆる「A述語」のことである。
4. Michael Tooley, *Time, Tense, and Causation*, Oxford University Press, 1997, pp. 33-40.
5. ただし、現在瞬間説をとらない論者もいる。例えば、ラッセルは「現在は瞬間ではない」と言う。

Bertrand Russell, *Theory of Knowledge*, Ch. VI, “On the Experience of Time,” Routledge, 1992.

また、第7節で述べるようにクレイグは現在は「非測定的概念」であると言う。クレイグの解釈によればブライアーも同じように考えている。

6. J. E. McTaggart, “The Unreality of Time,” *Mind*, vol. 17, 1908, pp. 457-474.
J. E. McTaggart, *The Nature of Existence*, 1927, Ch. 33, “Time.”
7. ちなみに、前述のメラーとラッセルはB論者であり、トゥーリー、クレイグ、ブライアーアはA論者である。ただし、クレイグとブライアーアは、トゥーリーと違つて、現在にしか実在性を認めない。
8. William James, *The Principles of Psychology*, Dover Publications, 1950, vol. 1, pp. 605-610.

なお、ジェイムズの見解については次の論文も参照せよ。

伊佐敷隆弘「見かけの現在」について」科学基礎論学会編「科学基礎論研究」第103号、2005年(印刷中)。

9. ジェイムズはこの幅の大きさを最大で12秒程度と見積もっている。*ibid.*, p. 613.
10. *Aurelius Augustinus, Confessiones*, xi, 15, 19-20.
なお、アウグスティヌスの時間論については次の論文を参照せよ。
伊佐敷隆弘「時間探求としての『告白』第11巻第14章～第28章」宮崎大学
教育文化学部「紀要 人文科学」第11号, 2004年, pp. 25-52.
11. William James, *ibid.*, pp. 609-610.
12. 無論、第3節の推論の隠れた前提B「厳密な現在は瞬間である」を認めれば、瞬
間である現在の内部で継起的経験が生じえないのは自明なことになるが、それでは第3節の推論と同じく循環論法になってしまう。Cを正当化する根拠はB以外
に求めなければならない。
13. ただし、時間の経過は継起的経験が生じるための十分条件ではない。経験が継
起しても、それらの経験の継起を認識するためには、さらに何らかの記憶のよう
なものが必要であろう。
14. 現在瞬間説の論拠として、この他に、「出来事の生じ始めた瞬間と終わる瞬間」
に基づく議論もありうるかもしれない。次のような議論である。
ほとんどの出来事は或る程度の時間的幅を持つ。その場合、「出来事の生じ始めた
瞬間」というものが存在する。それは、当該出来事が「現在の出来事」であり
始める瞬間である。また、その出来事が終わる瞬間も存在する。それは、当該出来
事が「現在の出来事」であるのをやめ「過去の出来事」になる瞬間である。初
めの瞬間（時点aとしよう）と終わりの瞬間（時点bとしよう）の間隔が見かけ
の現在をはみ出すほど長い場合（例えば東京オリンピックという出来事は15日間
という時間的幅を持っている）、初めの瞬間と終わりの瞬間とは一つの現在には含
まれず、それらは別々の現在に属する瞬間である。それゆえ、この初めの瞬間（お
よび終わりの瞬間）は瞬間としての現在である。
このような議論であるが、この議論も前提Aを置かなければ最後の結論は導け
ない。この議論から言えるのはたかだか「時点aと時点bとは別々の現在に含ま
れる」ということであって、それらの別々の現在がそれぞれ「瞬間」であるとい
うこととは、前提A抜きでは言えない。
15. 結局、「現在が瞬間である」とは「AとAの逆の両方が成り立つ」ということであ
り、「現在が瞬間でない」とは「Aの逆は成り立つが、Aは成り立たない」とい
うことである。これは線イメージに頼らない定式化である。
16. Bertrand Russell, *The Analysis of Mind*, Allen & Unwin, 1921, "Lecture
IX: Memory," pp. 174-175. 邦訳、B・ラッセル「心の分析」勁草書房, 1993年,
「講義IX 記憶」, pp. 205-207.
17. これらの問いは、現在に「幅」があると考えた場合、その幅の大きさの問題や、
幅の端にある境界の性質の問題として通常問われている問いに相当する。例えば、
マキノンは「そもそも、もし現在に長さがありうるなら、それが人生全体、数世
紀、数千年紀を含むほどの長さを持たないと想定する理由は全くない」と言う。
Neil McKinnon, "Presentism and Consciousness," *Australasian*

Journal of Philosophy, Vol. 81, No. 3, 2003, p. 319.

18. 物個体に関する4次元主義(four-dimensionalism)はとらない。その理由については別稿で論じる。
19. 次の論文によれば、このことが予期と想起の違いを成り立たせる。
伊佐敷隆弘「過去の確定性」日本哲学会編『哲学』第56号、2005年、pp.130-141。
20. この論文執筆の約4年後に開催予定である。
21. ただし、「実在の人物だと考えられていた人が、実は架空の人物だった」というような仕方で、物個体の存在が取り消されるのと同様に、「実際に起こった出来事だと考えられていたことが、実は架空の出来事だった」という仕方で、出来事個体の存在が取り消されることはありうる。また、この取り消しに伴って、存在に関する人々の信念が変化することもありうる。しかし、物個体と出来事個体のこれらの共通点は、「物個体についてその『消滅』を語ることができるのでに対し、出来事個体についてその『消滅』を語ることはできない」という論点に影響を与えない。
しかし、物個体と出来事個体の異同と関連については論ずべきことが多く残っている。目下準備中の論文「出来事とはいかなる存在者か」においてさらに議論を詰めて行きたい。
22. これはクレイグの用語である。ただし、クレイグは現在瞬間説に関する議論と瞬間的時点説に関する議論を仕分けせずに行なっており、彼の議論は十分な説得力を持つものではない。
William Lane Craig, *The Tensed Theory of Time*, Kluwer Academic Publishers, 2000, pp. 245-248.
23. したがって、「限りなく近い過去」の出来事個体を指示すれば、その幅は限りなく小さくなるから、「現在」をかぎりなく瞬間に近いものとして考えることもできる。逆にその幅を無限に大きくすることは難しい。というのは、遠い過去の出来事個体を指示するとき、他の（もっと新しい）出来事個体への指示を一切伴わずに、当該出来事を指示するのは困難だからである。また、遠い過去の出来事個体の場合、日付を頼りに指示が行なわれることが多いであろうが、日付は時間系列の成立後に現れるものであるから、この系列上には無数の出来事個体が指示可能なものとして既に存在している。それゆえ、その場合「過去でないものとしての現在」の幅はむしろいつでも縮小される用意のもとにある。
24. 大森莊蔵「時は流れず」青土社、1996年、pp. 8-9.
25. まったく依存していないかどうかについては留保する。
26. これはホワイトヘッドがとっていた立場である。
Alfred North Whitehead, *The Concept of Nature*, Cambridge University Press, 1964, Ch. 8, "Summary," especially p. 171. 邦訳、A・ホワイトヘッド「自然という概念」松嶺社、1982年、第8章「要約」、pp. 194-195.
27. Arthur N. Prior, *Papers on Time and Tense*, New Edition, Oxford Univer-

現在は瞬間か

- sity Press, 2003, p. 16.
28. cf. E. J. Lowe, *The Possibility of Metaphysics*, Oxford University Press, 1999, Ch. 6, “Substance and Dependence,” especially pp. 152-153.

(宮崎大学)